

中国雲南省北西部における古第三紀の古地磁気学研究

Tertiary paleomagnetic data from northwestern Yunnan, China

佐藤 謙[1], 乙藤 洋一郎[2]

Ken Sato[1], Yo-ichiro Otofujii[2]

[1] 神戸大院・自然・環境, [2] 神戸大・理・地球惑星

[1] Graduate School of Sci. and Tech., Kobe Univ., [2] Earth and planetary Sci., Kobe Univ.

中国雲南省北西部の蘭坪県及び雲龍県周辺において、始新世の赤色砂岩を合計 15 サイトより定方位採取した。段階熱消磁実験により 670 以上でアンブロックする高温成分が分離できた。

9 サイトより得られた特徴的磁化成分は褶曲テストをパスし、始新世の時代に獲得した初生磁化であると考えられる。9 サイトの平均磁化方向は、偏角 = 266.1°、伏角 = -39.8°、 $95 = 11.2^\circ$ であった。

アジアにおける最も大きなテクトニック・イベントの1つに、約5千万年前に起こったインド亜大陸のアジアへの衝突が挙げられる。このインド亜大陸の衝突によってアジアが大きな変形を受けたことが予想される。

インドシナブロックの北部を占めるスーマオテレーンはインド亜大陸と揚子地塊の間に位置しており、インド亜大陸の衝突による直接的な変形現象を記憶していると考えられる。

スーマオテレーンにおける白亜紀の古地磁気研究は、今までに幾つか報告されており、スーマオテレーンの白亜紀以降の時計回り回転を示している。しかしながら、古第三紀の古地磁気データはそれほど多くの報告がなされていない。新生代のスーマオテレーンの変形の形態を探るには、さらに多くの古第三紀の古地磁気データ必要である。

本研究では、中国雲南省北西部の蘭坪県及び雲龍県周辺において、始新世の赤色砂岩を合計 15 サイトより定方位採取した。蘭坪県と雲龍県はスーマオテレーンの北部を占める蘭坪盆地に位置している。

段階熱消磁実験の結果、670 以上でアンブロックする高温成分が分離できた。9 サイトより得られた高温成分は褶曲テストをパスし、この特徴的磁化成分は始新世の時代に獲得した初生磁化であると考えられる。9 サイトの平均磁化方向は、偏角 = 266.1°、伏角 = -39.8°、 $95 = 11.2^\circ$ であった。